

## 暗黙の知を再び語ることの意義

—身体技法の伝承場面を手がかりに—

堀 雄紀

### 1. はじめに

本稿の目的は、マイケル・ポランニー (Michael Polanyi, 1891-1976) によってその重要性が示唆された、言語によっては決して説明し尽くされ得ない「暗黙の知」について、そうとわかっていながらあえて言語で語ろうとする営みに、どのような意義を見出すことができるのか、身体技法の伝承場面における観察・分析を通じて明らかにすることである<sup>1</sup>。

ポランニーは、「私たちは、語ることができるより多くのことを知ることができる」[Polanyi 1966: 4] という経験的事実を指摘するところから始め、およそ私たちが「知」と呼ぶものや「知る」と呼ぶことの全てについて、その根幹には暗黙裡に進行する過程があることを示した。ポランニーの鍵概念でもある〈暗黙知 (tacit knowing)〉は、本来はこの「暗黙裡に進行する過程」を指している。しかし近年の諸研究において、「暗黙知」は経済・経営の理念とも結びつきながら、「言語化されておらず明示的でない知識」を指す語句として用いられている<sup>2</sup>。これは結局のところ、「言語化されている／されていない」という軸によって知識を二分しつつ、一方の「言語化されている」知識の有用性・絶対性を前提として、未だ言語化されていない（翻っていずれば言語化され得る、されるべき）知識である「暗黙知」を言語化し、便利な明示的知識に変換することを求めるものである。そこでは、言語によっては明示的に語り得ない「知」の領域が軽視されており、「あえて語る」ことの意義が十分に検討されているとは言い難い。

では、「知」の伝承という問題を考える際、ポランニーの理論は当事者が「黙して語らない」ことを美德とみなすのだろうか。本稿が示す結論は、むしろその逆である。事実として、様々な「知」の実践、身体技法の伝承の現場においては、指導者が学習者に対し、曰く言い難い何かを言葉で伝えようとする場面が頻繁に観察される<sup>3</sup>。そこにポランニーの枠組みを持ち込むことは、語り得ない領域があるとわかっていながらあえて語るということがどのような事態なのか、先の派生的な「暗黙知」の見立てを越えて描写していける可能性を秘めているのである。

本稿では、いくつかの具体的な身体技法の伝承場面を参照しながら、それらの構造論的把握を試みる。その手法的な狙いは、語られた内容の真偽や個々の行為の成否といった判断に留まることなく、語りという営みが生起する相互作用 (interaction) のダイナミズムを活写することにある。そこで本稿が目指すのは、グレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson, 1904-1980) のコミュニケーション理論である。ベイトソンは徹底したフィールドワークを基礎とし、情報理論やサイバネティクスなどを取り込みながら、「関係 (構造)」から新たな「関係」が自己生

成していく過程を描写する説明法を打ち立てた<sup>4</sup>。その理論の援用により、ポランニーが示した枠組みをより精緻で拡張的なものとし、そこから実践現場における様々な生成・変容の構造を捉え直すことで、「あえて語る」ことの意義がより明確になっていくと期待される。

本稿ではまず、前述のような術語の混在という問題も含めて、ポランニーにおける関連概念を精査し、次いでそこにベイトソンの理論を組み合わせ、本稿が用いる理論枠組みを明確にしていく。その上で、具体的な身体技法の伝承場面を取り上げながら、それらの構造論的把握を通じて、「暗黙の知」があえて語られることの意義を明らかにしていきたい。

## 2. 「知る」とはいかなる事態か —理論枠組みの整理

### (1) 〈暗黙知〉

ポランニーが「知る (knowing)」というとき、そこには、ドイツ的な「知っている (wissen)」と「できる (können)」、ライル (G. Ryle) のいう「内容を知ること (knowing what / that)」と「方法を知ること (knowing how)」、いわば理論的な「知」と実践的な「知」が、ともに包含されている<sup>5</sup>。そして、この「知る」の二側面は相似た構造を持ち、互いに他方がなくては存在し得ないと指摘される。その上でポランニーは、「そもそも私たちは〈暗黙知 (tacit knowing)〉を、語ることができるより多くのことを知る方法と見なしたのだった」(傍点筆者) [Polanyi 1966 : 17-18] と述べる。つまり〈暗黙知〉は「語ることができるより多くのこと」と分けられるものそれ自体ではない。「知の探求において成し遂げられる、経験の能動的な形成 (active shaping)」あるいは「統合 (integrating)」こそが、ポランニーが「偉大にして不可欠な暗黙の力 (tacit power)」とみなすもの、すなわち〈暗黙知〉に他ならないのである [ibid. : 6-7]。

ポランニーは、「知が暗黙のうちに獲得されるための中心的な (the principal) メカニズム」を明らかにするため、「閾下知覚 (subception)」の実験を具体例にとる。実験では、被験者が特定の「ショック語 (shock words)」に関連する事柄を口にしたときに、必ず電気ショックを与えるという操作が行われた。すると、被験者はショック語に関連する言葉を一切口に出さなくなり、喋りながら電気ショックを出し抜くようになった。これについて私たちは、被験者がショックを回避する「方法を知った」、ショック語に関連する事柄の「内容を知った」、そのような「知」を暗黙裡に「獲得した」とも言えるだろう [ライル 1987 : 28]。ところが被験者は、自分がどんな言葉を避けているのかどころか、ショックを避けるために「特定の言葉を避けている」ということにすら自覚がなかったのである [Polanyi 1966 : 7-8]。

ここに、〈暗黙知〉の基本的な構造がある。すなわち、「ショック語に関連する事柄」(第一条件、近位項)と「後に続く電気ショック」(第二条件、遠位項)という二つのものごとが、被験者によって繋ぎ合わされ、意味深長な (meaningful) 関係が樹立されている。これを機能的に見ると、被験者は「電気ショック」に向かって「ショック語」から注意を払って (attend from) おり、そこには「注意」の移動が認められる。また現象的に見ると、被験者は「電気ショック」の「現れ (appearance)」において「ショック語」を把握しているのであって、「ショック語」は「電気ショック」が到来するパターンの中に位置づけられている。それを意味論的に見ると、**「ショック語」は「電気ショック」の到来を意味して (signify) おり、被験者の注意が向く**

のもその「意味」に対してである。そして、この事態を存在論的に言い換えれば、このような「繋ぎ合わせ」を遂行するのが他でもない〈暗黙知〉であって、被験者は二つの項を含み込む「包括的存在 (comprehensive entity)」を理解しているということになる [ibid. : 9-13]。

このように、ポランニーにおける〈暗黙知〉は、「知る」という事態の基盤となる、暗黙裡に進行する過程を指す。〈暗黙知〉によって諸要素は統一性をもった包括的存在へと統合され、その包括的存在において意味づけられている。したがって、本来的な〈暗黙知〉にかけられた「暗黙に (tacit)」という限定は、「言語化されている／されていない」あるいは「言語化できる／できない」という区別に基づくものではない。言語化の問題以前に、それは私たちの自覚や意識の及ばぬところで、「知」の前提として潜在化しているのである。

また、以上の把握をもとにすれば、①本来的な〈暗黙知〉、②派生的な「暗黙知」、③本稿の主題である「暗黙の知」の三者を腑分けする、大まかな補助線を引くことができる。すなわち、②「暗黙知」と③「暗黙の知」はともに、①〈暗黙知〉の作動によって生じる、潜在的過程の産物である。しかし、②「暗黙知」はこの「産物」が最終的には言語化され得ることを前提とし、一方の③「暗黙の知」は言語化しきれない領域が残ることを重視する。「勘」や「コツ」など、両者の「知」に含まれるものはほぼ共通しているが、それらに向ける眼差しが決定的に異なるのである。必然的に、語るという営みについても、②「暗黙知」という見立てでは、それが知識の明示的共有に向けた当然の要請とされるのに対し、③「暗黙の知」においては、語り得ないものでも「あえて」語らざるを得ないという矛盾が重要になる。

ポランニーは加えて、あらゆる包括的存在に論理的な階層構造があることを指摘している。例えば「スピーチ」について考えてみると、そこには、①声を生む、②単語を生む、③文を生む、④文体を生む、⑤文学的な構成を生む、という五つのレベル（層）が見出される。またそれぞれのレベルは、①音声学、②辞書学、③文法、④文体論、⑤文芸批評、という自らの規則に従属している。そして、これら各レベルの規則は、自分のすぐ上のレベルの規則に制御されて機能している。しかし、下位レベルの諸要素を統括する規則によって、より上位レベルの組織原理を表すことはできない。スピーチにおける発声が音声学の原理に反することはないが、同じ原理に基づいて単語を構築することはできないのである [ibid. : 35-36]。

このような、上位レベルの組織原理から下位レベルの構成要素に及ぼされる制御を、ポランニーは「境界制御の原理 (the principle of marginal control)」と呼んだ。この名称は、下位レベルの原理が制御できず未決定 (open) なままにしている要素、すなわち「境界条件 (boundary condition)」が、上位レベルの原理によって制御されていることに由来する。スピーチにおいて無秩序に単語が並んでしまうと文章が成立しなくなるように、下位レベルの活動が上位レベルの制御を逃れると、その上位レベルは機能しなくなってしまう。この境界制御の原理が、一定の構造を持つ全ての包括的存在の機能を、根底から支えているのである [ibid. : 40-41]。

こうした論理的階層構造において〈暗黙知〉の基本的な構造を記述し直せば、私たちの「知」は常に、下位レベルにある諸要素（近位項）から上位レベルに当たる包括的存在（遠位項）へと注意を移す、という形になっている。例えば、私たちはアテネのパルテノン神殿などの風物（下位レベル）を通してギリシア文化（上位レベル）を把握している。一方で、ギリシアは地中海なりヨーロッパなりを構成する諸要素の一部と見ることもでき、あるいは神殿を構成する

柱や石材から注意を向けることもできる。つまり、論理的階層構造は上にも下にも無限に繋がっていくので、ある場合に上位レベルであったものが、「注意の向け方」によっては下位レベルになることや、その逆もあり得るのである [栗本 1988 : 20-24]。

ここにおいて、〈暗黙知〉の具体的な作動が、「注意の仕方」によって左右されるという事実が明らかになる。また〈暗黙知〉そのものも、まさしく注意の仕方によって、「知」を形成する「力」や「働き」、あるいは「知」を獲得するための「方法」や「知（知識）」とも見なされ得る。つまり、それは「knowing」でありながら「knowledge」の側面も併せ持つのである<sup>6</sup>。

## (2) 身体技法と伝承

ポランニーにおいて身体技法は、「技能 (skill)」あるいは「技芸 (art)」という語で扱われ、それら「芸術・運動・専門分野の技能 (skill) によるパフォーマンス」は、〈暗黙知〉の発露の代表例と目されている [Polanyi 1966 : 6]<sup>7</sup>。ポランニーは技能について、それは「自分でも明示できない諸関係に従って、確認も識別もできない単純な筋肉の運動を結びつけるもの」 [ibid. : 8] だとした。また、「技能的行為 (skillful performance) の目標が達成されるのは、それに従う個人にはそうと知られることのない、一組の規則を遵守することによってである」 [Polanyi 1958 : 49] とも述べている。ここに〈暗黙知〉の基本構造を見出すことができる。すなわち、私たちは「一連の筋肉の動作」という下位レベルから「身体技法の遂行」という上位レベルに向かって注意を払うために、身体技法 (包括的存在) を把握する反面、個々の筋肉運動それ自体は明らかにすることができない。あるいは、ある身体技法が実践されているとき、私たちはその腕前 (上位レベル) を介して、個々の筋肉の動作 (下位レベル) を把握している。もちろん、「一組の規則」のレベルを細分化すれば、筋肉の動作を伴わない〈暗黙知〉の作動も観察される。また、「科学研究の技芸 (the art of scientific research)」とも呼ばれた洞察や発見、ものの考え方にも、〈暗黙知〉の構造を見出すことができよう [Polanyi 1958 : 53, 1966 : 10-11]。

では、身体技法の伝承という営みについて、ポランニーはどう説明するのだろうか。先に確認したように、上位レベルに当たる身体技法については、下位レベルの諸要素を詳述したところで、論理的に説明することはできない。上位レベルの規則を無視してそれを強引に行うことは、「破壊分析 (destructive analysis)」として身体技法の統合を崩壊させるきっかけとなりかねない [ibid. : 50-52]。身体技法にはこうした詳述不可能性 (unspecifiability) がつきまとい、「それはただ師匠から弟子への例示としてのみ伝えることができる」 [ibid. : 53] という。

そのような「例示」において指導者が包括的存在を示し、学習者がそれを理解しようとする場合、まずは指導者が諸動作を実践的に結合して見せる。このときの指導者は、そのパフォーマンスを構成する諸動作を、自らの身体という上位レベルにおいて感知し、制御している。換言すれば、構造上、自らの身体を (知的に) 延長し、身体の外に現れるはずの諸動作を内に包み込んでいるのであり、指導者 (の知覚) は諸動作に「潜入 (dwell in)」している。一方の学習者は、指導者の諸動作を自らの身体で包み込み、自らの身体において統合することによって、外からそれに潜入しようとする。学習者はこの探索的な努力をもって、指導者の感触 (feel) を我が物とすべく腕を磨いていくことになるのだという。翻って、学習者は包括的存在を理解しようとする以前に、否応もなく、包括的存在の統一性を示す何者か (指導者) に出会い、何

らかの組織化された技量に直面しているのである [Polanyi 1966 : 16, 29-30] <sup>8</sup>。

しかしながら、こうしたポランニーの説明は、指導者と学習者を切り離し、各々が独立して諸要素を統合するという描写になっている <sup>9</sup>。伝承がそれだけで完結するのであれば、指導者は単に「例示」を繰り返せば良く、詳述不可能な「暗黙の知」をあえて言語で語ろうとする必然性はないだろう。そこには、指導者と学習者の緊密な関わり合いを通じた、そうした関係性があって初めて可能となる、ダイナミックな「知」の生成が観察されるはずである。

### (3) コミュニケーション理論の導入

前述の問題を克服するため、ここからはベイトソンのコミュニケーション理論を導入し、ポランニーの理論枠組みを拡張していく。まず、コミュニケーション理論における鍵概念は「情報」であり、それは「差異を生む差異 (a difference which makes a difference)」と定義されている [Bateson 2000 : 459]。例えば、電灯のスイッチを「入れる／入れない」という差異は、光が「灯る／灯らない」という差異を生むので情報である。しかし、スイッチを「激しく／ゆっくり」入れたという差異は、光に対する情報ではない [安富 2006 : 15-16]。ここでは、スイッチの差異が光の差異という別のものごとに「変換」されており、情報の伝達という事態は、差異が別の差異へと次々に変換されていく過程と理解することができよう。およそあらゆる出来事について、こうした差異（情報）の変換過程を基本単位とする「コミュニケーション」と見立てて説明しようというのが、ベイトソンの試みなのである [Bateson 2000 : 282-283]。

より複雑な出来事として、木こりが斧で木を切るという技能的行為を考えてみよう。コミュニケーション理論においてそれを捉えるならば、木についた差異→木こりの網膜上の差異→脳神経内の差異→筋肉の差異→斧の動きの差異→木についた新たな差異...という、情報が変換され循環する回路 (circuit) 構造、すなわち「フィードバック・ループ」が見出され、この構造の中で斧の軌道が自己修正されていることがわかる。換言すれば、技能的行為は「自己修正的コミュニケーション・システム」において遂行されるのである [ibid. : 464-465]。そして、このような回路の両端に、指導者と学習者というそれぞれに自己修正する人間を置いた場合、行為の自己修正過程において変換の只中にある様々な情報が、絶えず各々の回路に入り込み、また変換されていくことになる。したがって、伝承場面においては、指導者・学習者間の相互作用を包み込み制御する、より高次のコミュニケーションの構造が予見される [矢野 1996 : 72]。

加えて、ベイトソンは「論理階型 (logical type) 理論」に基づき、コミュニケーションにおける「コンテキスト (context)」の重要性を指摘した <sup>10</sup>。例えば、日常会話において言語的メッセージが単体で意味を成す (= 解読される) という事はない。私たちは、メッセージ自体の流れや、表情・声のトーン・仕草といった体感的 (kinesic) シグナルで構成されたメタ・メッセージから、「メッセージの読み取り方」すなわちコンテキストを読み取り、それに基づいてメッセージの具体的な意味を特定している [同上書 : 30]。コミュニケーション理論ではこれについて、コンテキストによって可能性の一部が否定されている、すなわち「拘束 (restraint)」されており、「冗長性 (redundancy)」 (= 予想のしやすさ) があると考えられる。より一般化すれば、コンテキストがある限り、私たちは次に起きる出来事をランダム以上の確立で予想することができるのである [堀 2017 : 4-5]。しかし、コンテキストを読み取るにも、その読み取り方を拘

束するコンテキストが必要になる。コンテキストのコンテキストを読み取るにもそのまたコンテキストが...と、ミクロのレベルからマクロのレベルへ、抽象レベルの違いによるコンテキストの階層構造は、「理念上、無限の同心円をなして広がっていく」[Bateson 2000 : 245, 408]。

ベイトソンのコミュニケーション理論の中核は、自己修正的コミュニケーション・システムの回路構造と、コンテキストの階層構造を組み合わせたことにある [矢野 1996 : 29]。これにより、上位システムが下位システムのコンテキストとして機能し、それを拘束するという、抽象レベルの異なるコミュニケーションが織りなす巨大な立体構造を見出せる。先の木こりの技能的行為でいえば、その上位に職業人としての木こりの生活システムがあり、さらに上位には木こりが住む地域の経済システムがある。逆に下位には木こりの体内の中樞神経系があるだろう。もちろん、現実世界の情報変換は同時多発的で複雑であり、常に多義性と不確実性を孕んでいるため、それら全てを理念的で厳密な論理階型に帰することは難しい。しかし、コミュニケーション理論が、自己修正的システムの独立した作動を越えて、システム同士を繋ぐより上位のシステムを認め、構造論的把握に巨視的な眼差しを提供することは確かであろう。一方で、コンテキストは常に所与のものとしてメッセージを拘束するかに見えて、逆にメッセージの累積によって構築されてもいる [同上書 : 77]。コミュニケーション理論は、システムの階層構造を下位から上位に向けて構築していくダイナミズムを前提とせざるを得ないのである。

ここにおいて、〈暗黙知〉とコミュニケーション理論が結合を果たす。〈暗黙知〉は、「ある差異群からそれを包括する上位レベルへと注意を移す」という形をとり、「複数の差異を情報として暗黙裡に統合し、より抽象レベルの高い包括的存在を構築する過程」として再記述されるだろう。〈暗黙知〉の作動によって、指導者・学習者それぞれの自己修正的コミュニケーション・システムが階層的に構築されるだけでなく、それを越え出た指導者・学習者関係における上位システムまでもが、階層的に構築されるのである。そして、情報がシステム内を駆け巡ると同時に、システム間に拘束・構築の力学が働くこの複雑な立体構造において、学習者は、指導者のパフォーマンスを制御するシステムに依拠しつつも、指導者とは異なる自分自身の構成要素を含み込んだ、新たな包括的システムを構築しなければならない<sup>11</sup>。しかし、〈暗黙知〉は同時多発的かつ「暗黙裡に」作動し続けており、それらがいつも伝承にとって望ましい方向に連鎖していくとは限らない。したがって、「暗黙の知」をあえて語ろうとすることの意義は、大きく見れば、学習者の探求的努力を〈暗黙知〉の制御によって支援するということにあるのではない。以上のような理論枠組みをもって、次章では具体的な伝承場面について考察していく。

### 3. 「語り」はいかなる事態をもたらすのか —伝承現場の構造論的把握

#### (1) 言葉という指示棒

伝承場面の最初の具体例は、淡路島人形座における人形浄瑠璃である。奥井遼による充実したフィールドワークの記録から、下に一部を取り出してみる。

Z1-10 Cの、こうすんねん。

C1-8 はい。

## 堀：暗黙の知を再び語ることの意義

Z1-11 それが、こう。

C1-9 前ですか？

T1-32 揃える、揃える。

Z1-12 前っていうのもあるし、これが、この、ここがな、離れよるねん。

C1-10 はい。いってます。

Z1-13 これが、なんぼ、大きい足であっても、ここはくつついたままやねん。

[奥井 2015 : 68]

これは『日高川嫉妬鱗』<sup>ひだかがわしつこのうろこ</sup>「渡し場の段」における「船頭」の動きから、〈一足立ち〉と呼ばれる箇所が指導されている場面である。人形は通常「足遣い」「左遣い」「頭遣い」の3人で操作するが、文中の「C」が学習者である足遣い、「Z」が指導者、「T」は指導補助に入った頭遣いである（左遣いは不在）。TとZが人形を操作し、Cが正面からそれを見ている。そして、Z1-10でCの動きの再現、Z1-11で手本の実演が行われている。Cには人形の「足を前に出しながら着地させるところが要点に見え」、「前ですか？」（C1-9）と質問したが、Zは「ここがな」と言いながら人形の踵を「コツコツぶつけ」、「離れよる」と説明した（Z1-12）。ここでようやく、Cは自分が〈一足立ち〉の間に人形の踵を離してしまっていたと気づく（C1-10）[同上書：71]。

この場面を通して、これまでに確認してきた〈暗黙知〉の基本構造に、いわば負の側面があることが垣間見える。ポランニーが最初に指摘したように、〈暗黙知〉によって統合された諸要素について、私たちは言葉で明示的に説明することができない。言い換えれば、〈暗黙知〉の過程は、情報のほとんどを無意識レベルの処理システムに沈め（sink）てしまっている。これについてペイトソンは、「意識の量的限界（quantitative limit）」に伴うシステムの経済的な要請だと考えた。しかしそれは、諸要素を「手放し」、意識的な利用を半ば不可能にするということをもって達成される[Bateson 2000 : 142-143]。つまりCは、自らが理解している〈一足立ち〉の包括的動作の中に、人形の踵が「離れる」ような諸動作を含めているが、〈一足立ち〉という「遠位項」へと意識を向けている限り、それらを明示的に意識することができない。さらに、今回の指導以前にもCは〈一足立ち〉の手本を観察しているはずだが、その時既に「踵の動き」という差異が情報に変換されないという事態は起きており、〈暗黙知〉の統合範囲から抜けていたとも考えられる。このままでは、人形浄瑠璃の身体技法というより上位の包括的存在から見れば〈一足立ち〉ではない、しかしC自身はそれを〈一足立ち〉だと理解しているものを通してZの諸動作が観察されるため、Cの諸動作とZの諸動作がCにおいて直接比較されることはなく、「踵が離れている」という差異が情報として明示的に見出される可能性は極端に低い<sup>12</sup>。

そうした状況を打開する契機となっているのが、指導者の「語り」あるいはC・Z・Tの三者による言語的コミュニケーションである。中でも重要なのは、Z1-12において、Zが人形の踵を動作で示しながら「これが」「離れよる」と発言している箇所だろう。ここでは、人形全体に生じ得る差異群の中から、踵に当たる領域が切り出され、「離れる」という動きとの主述関係が明示されている。これは、ポランニーが「言葉の指示棒（verbal pointing）」と呼んだ、言語の表示作用をもってはじめて可能となったことなのである[Polanyi 1966:7]。しかしながら、「踵」が「離れる」というメッセージは、「踵」を「離すな」という命令（command）でしかなく、動

作としてはまだ多くの可能性が残されている。そこで、T1-32の「揃える、揃える」という発言がコンテクストとして機能し、「揃える」と「離さない」を統合したものが、動作の可能範囲として示されることになる。当然、この一連の情報変換の中において、C1-9の「前ですか?」という発言が上位コンテクストを再構築し、ペイトソンのいうアイコン的 (iconic) なコミュニケーションに、言語的なコミュニケーションの軸を差し込む契機となっていることも見逃せないだろう<sup>13</sup>。このような、現場で示される動作による相互作用に、言語による相互作用が噛み合うことを通じて、学習者の〈暗黙知〉において取りこぼされていたものが再び明るみに出され、既存の自己修正的システムを再構築する可能性が開かれるのである。

## (2) 比喩表現の可能性

伝承場面のもうひとつの具体例は、クラシック音楽である。本稿筆者は、長年自分自身も実践に携わっている、音楽の領域における教授場面、特にヴォイス・トレーニングを対象とし、そこに観察される語りを記録する調査を行っている [堀 2017]。<sup>14</sup> そこでは、指導者と学習者の相互作用に大きく関与する、下のような顕著に比喩的な言語表現が見出された。「ト」が指導者であるヴォイス・トレーナー、「B」が学習者である。

B88 ト：((範唱))。なんかこうずーっとこう、上のほうに。こう……虹がかかっていると思って下さい。

B89 B：はい。

B90 ト：その、虹の橋の上をこうずーっと渡っていっているような感じで。

このような、身体技法の伝承場面に現れる比喩的言表の先行研究としては、生田久美子らの「わぎ言語」論が挙げられよう。生田は、例えば民族芸能の伝承場面において観察される「天から舞い降りる雪を受ける」といった言表に着目し、ハワード (V. A. Howard) の“language of craft”という術語を借用して「わぎ言語」と呼んだ。それらの言表は、科学言語 (先の例では「手を右上45度の角度に上げなさい」) よりも、学習者に望ましい動作 (「形」) を生じさせる上で有効であることが指摘されている [Howard 1982 : 59-116、生田 2007 : 97]<sup>15</sup>。生田において、「わぎ言語」によって導かれる認知プロセスは以下のように説明された。すなわち、まず学習者はそのような「逸脱的表現」に直面し、当惑状態に追い込まれる。そこから学習者は、指導者の意図を押し量りつつ、自分自身が蓄積した知識と「わぎ言語」を「無理に対応づけて考えるようになる」。言表の文字通りの意味に基づき、それが比喩的に指し示し得る様々な可能性の中から、身につけようとする「わぎ」には不適當な属性を「次々に捨てていく」のである。その結果として、「身体全体で望ましい「形」を思い当たる」のだという [生田 2007 : 100-103]。

しかし、身体技法の伝承場面で観察される比喩的言表の作用を考察するに当たっては、本稿の理論枠組みに基づけば、若干の補足が必要となるだろう。まずは、比喩 (メタファー) の基本的な性質を確認する必要がある。メタファーについてリクール (P. Ricoeur) は、それが「創造的想像力」によって「不在の事実を再現するにとどまらず、それまで離れていた意味論的な場と場の間新しい関係をつくりだす」と指摘した [リクール 2006 : ix]。またペイトソンは、



メタファーが、意識的または無意識的に知覚した諸々の「関係」を示す一方で、その関係を示す具体的な項目については言及しない、という点に注目している [Bateson 2000 : 417-]。これらを踏まえた上で、学習者（あるいは指導者）の〈暗黙知〉の過程を分析していかなければならない。

具体的に見ていこう。まず B88 トにおいて、指導者は学習者の遙か上方に、「虹」が「かかっている」と想像することを指示（命令）している。この時点で、この比喩的言表が結ぼうとしている諸動作、およびその「関係」は全く明らかになっていない。指導者と学習者が社会的に結んでいる「師弟関係」は、この言表が冗談として提示されたわけではないことを暗黙のうちに示唆してはいるが、言表そのもののコンテクストの拘束は緩く、無数の可能性が残されたままとなる。しかし、そのことによりかえって、学習者には、「虹」という言葉が指し示す経験群と、それらに少しでも関連する経験群をできるかぎり列挙する余地が与えられる。ここで、先の生田による分析のように、「虹」という言葉の属性から、学習者が「声楽」に関与しないとみなすものを次々捨てていくという可能性も、全くないわけではないだろう。しかし、学習者の既存のシステムにおいて、声楽のレッスン中に「虹がかかっている」様子を想像させられることは、間違いなく逸脱の蓄積として機能する。この時点で学習者におけるコミュニケーション・システムの階層構造には、大きな揺らぎが生じることになる。また、「虹がかかっている」という遠位項は、一連の歌唱動作の中の一部を具体的な近位項とさせる類のものではなく、学習者の〈暗黙知〉は、より高度な抽象レベルでの統合を迫られる。

次いで、B90 トにおいて、その「虹」を「橋」として「渡る」という図が示される。私たちは日常生活の中で、橋を渡る経験は数多くこなすだろうが、虹を渡るという経験そのものをこなすことはできない。したがって、「虹を渡る」という言表を遠位項としつつも、膨大な情報が近位項として現れ、まずこの時点で、言語レベルにおける〈暗黙知〉の起動が要請される。その一方で、実際には歌唱という動作を伴うことになるので、身体技法を構成する（と学習者によって目されてきた）アイコン的な諸動作をも、「虹を渡る」を遠位項として統合されていかなければならない。つまり、こうした比喩的言表は、言語レベルの統合と、アイコンレベルの統合を要求しつつ、さらに、それら抽象レベルの異なる統合の群をさらに統合することを要求する。「語り」によって生成される比喩的なコミュニケーションには、身体技法という包括的存在から見た諸動作の統合という次元を超えて、より高次の暗黙的統合を促す作用が認められるのである。

#### 4. おわりに

本稿では、言葉にできない知をあえて言葉にしようとする「語り」の意義を、身体技法の伝承場面の考察を通じて明らかにするため、まず、ポランニーの〈暗黙知〉という鍵概念を手がかりとしながら、そこにベイトソンのコミュニケーション理論を組み合わせ、新たな理論枠組みを構築した。そこでは、〈暗黙知〉が何らか特定の「知識」を示すのではなく、暗黙裡に（あるいは無意識に）進行する、諸要素の統合とそれを通じた包括的存在の理解であることが示された。そして、そのような暗黙的統合は、抽象レベルの違いによって階層構造をなし、それはあらゆるコミュニケーション（情報伝達）においても適用できる可能性を有する。

次いで本稿では、この新たな理論枠組みを用い、具体的な伝承場面を考察していった。そこにおける「語り」の意義として、本稿が見出したものは大きく二点である。ひとつは、膨大な差異（情報となり得るものの可能性）の中から特定の範囲を明示的に指定し、あるいは学習者が〈暗黙知〉によって無意識のうちに取りこぼしていた情報に再び光を当て、それを足がかりとした包括的存在理解の再構築を促すことである。もうひとつは、比喩的な言語表現によって、言語レベルとアイコンレベルの〈暗黙知〉を作動させつつ、さらにそれらの各レベル群の統合を要求するという、より高次の包括的存在の構築を促すことである。

このように、身体技法の伝承場面を構造論的に把握していくことは、その現場で展開されているコミュニケーションを、神秘性や技巧性に帰着させることなく、得られた知見を他の様々なコミュニケーションへと応用していける可能性を持っている。具体的には、例えば学校教育の現場に蔓延する定型化した「指導言」を、〈暗黙知〉の構造と「語り」の意義を踏まえてどのように見直すことができるのか、さらに広くは、「教育を語る言説」そのものをどのように見直すことができるのか。そのような問いに挑む契機を与えてくれるであろう。

## 註

- 1) 本稿における「身体技法」は、モース (M. Mauss) によって提出された定義に基づいている。すなわち、身体技法とは「人間がそれぞれの社会で伝統的な態度でその身体を用いる仕方」[モース 1976 : 121] であり、歩き方や座る姿勢など、日常的なものも含まれる。
- 2) この傾向が顕著なのは、経営学（経営工学）において引用される場合である。野中郁次郎は、「伝達のしやすさ」という基準から知識を「暗黙知」と「形式知 (explicit knowledge)」に区別した。その上で、組織（企業）がイノベーションを達成するには、知識の共有・生産スパイラルを促進しなければならないとし、「暗黙知」を形式知に「表出化」させる必要性を強調する [野村・竹内 1996]。こうした主張は 90 年代後半の欧米で台頭してきた経営コンセプトである「ナレッジマネジメント」から派生しているが、そこでの「知識」は経営資源として扱われている。これについてフラー (S. Fuller) は、知識生産に経済の理念が持ち込まれることで、徹底したコストの節減が目指され、かつ知識の深耕よりも占有が優先されることを指摘している [フラー 2009]。
- 3) 語らないことをよしとし、ひたすら技術を「盗む」よう求める共同体が多くあるのも事実である。伝統芸能における内弟子制度などにおいては、それが淘汰を促し、芸能共同体の維持に一役買うという側面もあるだろう [奥井 2015 : 11、生田 2007 : 70-76]。
- 4) 情報理論とサイバネティクスは、50 年代アメリカにおける学際的な統合理論（グランド・セオリー）探求の双璧を成し、ベイトソンもそこに参与している [赤堀 2009]。
- 5) ライル (G. Ryle) はそれまでの哲学が理論や真理そのものだけを「知」であり学問の対象であるとみなし、knowing how の問題を無視してきたことを批判した [ライル 1987 : 27]。同様に knowledge を二分する枠組みとして、アンダーソン (J. R. Anderson) の認知心理学における「宣言型知識 (declarative knowledge)」と「手続き型知識 (procedural knowledge)」があるが、両者の相補的關係は重視されていない [アンダーソン 1982 : 235-239]。
- 6) 安富歩は、「暗黙知」という訳語が元の動名詞 knowing を単なる名詞に訳していること、ポ

- ランニー自身も knowing と knowledge を混在させていることを指摘し、それが〈暗黙知〉についての誤解を招きやすいとしている [安富 2006 : 32-33]。しかし栗本慎一郎によれば、表記が固定されていないのは、全く同じものでも注目の仕方によって異なる相で現れるということを、ポランニーが意識していたからだとも考えられるという [栗本 1988 : 26]。
- 7) ポランニーのいう skill には、戦前・戦後日本で繰り広げられた「技術論論争」に見られる「方法(手段) - 能力」という構図に基づく「技術 - 技能」の区別はない [生田 2011 : 4]。
  - 8) これは、ハワード (V. A. Howard) が熟達の条件とみなした、身体技法の非言語的な「開示 (showing)」、あるいは、モースにおいて身体技法の伝承 (= 「威光模倣」) の条件となる、「成功するのを目のあたりに見た」こととも重なっており、倉島哲はこれを「経験のリアリティ」と呼んでいる [Howard 1982 : 70、モース 前掲書 : 128、倉島 2005]。
  - 9) ポランニーは、「知っているが言葉にできないことがらについて話す」という「自己矛盾」を回避するため、「実験用の役割分担 (experimental arrangement)」を堅持していた。すなわち、「実験者 (観察者)」が他者の「言葉にできない知」を観察・記述する一方で、「被験者」が自分の「知」を自ら語る必要はない、という構図である [Polanyi 1966 : 8]。
  - 10) 論理階型は、数理哲学のラッセル (B. Russell) とホワイトヘッド (A. N. Whitehead) から援用された概念である [Bateson 2000 : 279]。
  - 11) これは境界条件を含み込む上位レベルの出現であり、ポランニーが「創発 (emergence)」と呼んだ過程に類すると考えられる [Polanyi 1966 : 45]。
  - 12) 奥井はこの状況を、C が「動きを習得していない」ために「間違っている動作と正しい動作を見分けられ」ず、Z の手本が「そのままでは手本として機能しない」のだと分析する。C 自身が理解する (間違った) 〈一足立ち〉という認識のフィルターを見出す本稿の分析とは若干異なるが、その後の言葉を介したやりとりが状況を打開する契機となったという見解は一致している [奥井 2015 : 67-72]。
  - 13) このことは、丸山圭三郎が、プリミティブで運動=感覚的な分節に基づく《身分け》と、言語によって非在の世界をも分節化する《言分け》の区別に基づいて論じ、またそこから、矢野智司がヘレン・ケラーの覚醒体験について「コードの二重化」を見出したこととも関連している [丸山 1982 : 18-20、矢野 1996 : 89]。
  - 14) 調査対象としたのは、指導者 1 名 (職歴 50 年以上) と、学習者 4 名 (学習者 A~D。学習者 C は筆者自身) である。指導者と一対一の対面で行われる個人レッスンの録音データ (各学習者が作成しており、基本的に調査者は同席していない) をトランスクリプトに書き起こした。その際、社会学における「会話分析 (Conversation Analysis)」の方法を参照し、西阪仰 [2001] の転写法を流用しているが、演奏を伴う場面を転写する都合から、「((範唱))」など独自の記号を用いた箇所がある。調査期間は 2009 年から 2013 年。指導者および各学習者に対しては、研究テーマおよび調査目的を書面と口頭で説明し、了承を得ている。
  - 15) 「わざ言語」研究はその後様々な発展を見せ、当初の「わざ」の伝承に役立つツールという解釈を離れ、具体的な「動き」や「行為」の指示の他にも、指導者の身体感覚と学習者の身体感覚の協調や共有を促すものが見出されるに至っている [生田 2011]。

## 文献

- 赤堀三郎 (2009) 「戦後アメリカにおけるサイバネティクスと社会学」『経済と社会：東京女子大学社会学会紀要』37巻、pp.19-34
- アンダーソン, J. R. (1982) 『認知心理学概論』(富田達彦ほか訳) 誠信書房
- Bateson, Gregory (2000) *Steps to an ecology of mind*, University of Chicago Press (=2000、佐藤良明訳『精神の生態学』新思索社)
- フラー, スティーヴ (2009) 『ナレッジマネジメントの思想：知識生産と社会的認識論』(永田晃也ほか訳) 新曜社
- 堀雄紀 (2017) 「身体技法の伝承における言語の役割——ヴォイス・トレーニングを例として——」『教育学研究』84巻3号、pp.1-12
- Howard, V. A. (1982) *Artistry: the work of artist*, Cambridge: Hackett Publishing Company
- 生田久美子 (2007) 『「わざ」から知る』東京大学出版会
- 生田久美子 (2011) 「「わざ」の伝承は何を目指すのか：Task か Achievement か」生田久美子・北村勝朗編『わざ言語：感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会、pp.3-31
- 倉島哲 (2005) 「身体技法への視角：モース「身体技法論」の再読と武術教室の事例研究を通して」『文化人類学』70巻2号、pp.206-225
- 栗本慎一郎 (1988) 『意味と生命：暗黙知理論から生命の量子論へ』青土社
- 丸山圭三郎 (1982) 「コトバの身体性と二つのゲシュタルト」『思想』698号、岩波書店
- モース, M. (1976) 『社会学と人類学Ⅱ』(有地亨・山口俊夫共訳) 弘文堂
- 西阪仰 (2011) 『心と行為：エスノメソドロジーの視点』岩波書店
- 野中郁次郎・竹内弘高 (1996) 『知識創造企業』(梅本勝博訳) 東洋経済新報社
- 奥井遼 (2015) 『くわざ』を生きる身体：人形遣いと稽古の臨床教育学』ミネルヴァ書房
- Polanyi, Michael (1958) *Personal knowledge : towards a post-critical philosophy*, Chicago: The University of Chicago Press (=1985、長尾史郎訳『個人的知識：脱批判哲学をめざして』ハーベスト社)
- Polanyi, Michael (1966) *The tacit dimension*, New York: Doubleday & Company, INC. (=2003、高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房)
- ライル, ギルバート (1987) 『心の概念』(坂本百大・宮下治子・服部裕幸共訳) みすず書房
- リクール, ポール (2006) 『生きた隠喩』(久米博訳) 岩波書店
- 矢野智司 (1996) 『ソクラテスのダブル・バインド：意味生成の教育人間学』世織書房
- 安富歩 (2006) 『複雑さを生きる：やわらかな制御』岩波書店

(教育学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2017年8月31日、改稿 2017年11月20日、受理 2017年12月20日)

## 暗黙の知を再び語ることの意義

—身体技法の伝承場面を手がかりに—

堀 雄紀

本稿の目的は、言葉によっては説明し尽くされ得ない「暗黙の知」をあえて言語化しようとする営みに、どのような意義を見出すことができるのか、身体技法の伝承場面における観察・分析を通じて明らかにすることである。そのために、M. ポランニーの〈暗黙知〉に着目し、「私たちの『知』を支える、暗黙裡に進行する過程」という定義に立ち戻った上で、G. ベイトソンのコミュニケーション理論を導入することで、「〈暗黙知〉によって構築される自己修正的システムの階層構造」という新たな理論枠組みを提示した。それに基づいて見出された「語り」の意義は、いずれも〈暗黙知〉の制御による学習者支援であった。ひとつは、言語の表示作用によって〈暗黙知〉が取りこぼした差異（情報）に注意を向け、既存のシステムの再構築を促すことである。もうひとつは、比喩的言語表現によって〈暗黙知〉を起動し、より高次の包括的統合を実現することである。

## Significance of Narrative about Tacit Knowledge: With Reference to the Transmission of Body Techniques

HORI Yuki

This paper examines the significance of narrative about tacit knowledge, via analysis about the transmission of Body Techniques. The paper explains the basic idea of “tacit knowing” proposed by M. Polanyi, and confirms its primal definition; tacit processes underlying our knowledge or knowing. The theory of communication proposed by G. Bateson is added, and the hierarchy of communication systems is discussed. The paper clarifies two main points. First, the denotative function of language calls attention to the difference (information) missed by “tacit knowing,” and causes reconstruction of existing systems. Second, metaphors activate “tacit knowing,” and give rise to comprehensive integration at a higher level.

キーワード：暗黙知、コミュニケーション、身体技法、伝承

Keywords: tacit knowing, communication, body techniques, transmission